

東條耿一詩集 朗読会

日時 平成十六年九月四日(土)午後二時より

場所 国立療養所多磨全生園 カトリック愛徳会聖堂

はじめに

詩人東條耿一 その生涯と作品

第一部 東條耿一と北條民雄

北條民雄の日記(昭和十年七月)

臨終記 東條耿一(昭和十二年十二月)

第二部 東條耿一詩集より

酸漿の詩・槍・伴侶・望郷臺

夕雲物語・樹々ら悩みぬ

一椀の大根おろし・静秋譜

天路讃仰・訪問者(遺稿)

第三部 東條耿一追悼

渡辺立子さんの回想記より

伊藤秋雄の追悼記(昭和十七年)

おわりに

祈り(聖歌)

はじめに

詩人 東條耿一 その生涯と作品

フランシスコ・ザベリオ、これは東條耿一の洗礼名です。十五歳の時、神山復生病院のレゼー神父より、洗礼を受けました。このカトリックの教えが生涯にわたり東條のこころの柱になるのです。

東條耿一は、一九一二年（明治四五年）四月七日、栃木県鹿沼に生まれしました。いままで調べた文献には、いまだ、はっきりいえませんが、八人兄弟姉妹の五男ではないかと思われます。兄弟八人のうち、三人が癩を発病しています。カトリック月刊誌「声」の昭和十六年一月一日、七七九号に、それは東條の晩年にあたりますが、寄稿された「癩者の父」というのがあります。また、妹立子の随筆などから、東條の生い立ちを見てみたいと思います。

東條の発病は、十五歳ですが、その二、三年前から顔に斑紋があつたようです。家には、次男の兄が癩を発病してをり、小さい頃から、ずっと、父の兄へ人並みの生活も出来ない者は、生きていても本当に詰まらぬ。生きている資格がない、長く生き恥を晒すよりは、一思いに死んだ方がましだ。死ぬには一分とはいらない、剃刀で一寸咽を切れば万事解決される、お前にやる勇気がなければ、父が咽喉を切つて手本を示そう。」と兄に死を迫り、東條も夜ゆつくり寝ていられなかつたようです。東條の生家はもともと、造り酒屋の裕福な家であつたらしいですが、火災にあい、身代を潰してしまいました。東條の記憶には、せまい長屋住まいの中で、次男の兄が押入れのなかに住まわされ、病が世間に知れないよう、世間の目を恐れて、汲々と悩み苦しむ家族の姿ばかり記憶に残っています。そうしたなかに、東條自身も、発病したのです。

父に死ね死ねと攻め立てられて、家を出奔していた兄は、身延山深敬園から神山復生病院に流れてゆき、そこから手紙で所在を知らせてきたのです。その、兄の入っている神山復生病院に、昭和二年八月三十日に、兄に呼ばれ、東條も入院するのです。「復生病院における私の生活については、私がドルウル・ド・レゼー師から受洗した事と日常生活が私の生涯に消えぬ印象を興へた事だけを記して置こう。」とだけ簡略に「癩者の父」に書いています。親に死ねと攻められ、生きる希望を全く失っていた十五歳の多感な東條が、神山復生病院で生き返るのです。

神山復生病院は、一八九〇年（明二三年）フランスの宣教師テストウイード神父によって設立されました。すべてフランスの資金によって設立され、パリミッションのカトリックの教え、それは西洋的な情感が色濃く病院内にあつたのだからと思えます。東條が洗礼を受けたレゼー神父は、第五代院長です。もともとフランスの貴族の生まれで、明治初期に日本に宣教師として来日され、日本各地を伝道して回られ、晩年自ら志願して、神山の院長になられました。体格のとても大きく、声も大きく、口角泡を飛ばす熱弁の説教をされたそうで

す。著書に「真理の本源」という改訂版まで出て、版を重ねたご本も残っていません。東條が入院している頃、復生病院には、後にナイチンゲール賞を受けられた井深八重さんが、看護婦の資格を取ってレゼー神父を私淑して戻っておられていたはずですが、井深さんがちょうど三十歳頃だと思えます、英語の教師をしていた英語力でレゼー神父や外人のシスターと患者とを繋ぐ、橋渡しをされていたようです。きっと東條も、井深さんの治療を受けながら、信仰を得ることができたのだらうと思えます。しかし、東條は、翌年の昭和三年四月十二日に、入院から僅か八ヶ月足らずで、顔の斑紋が消えたのを、癩が直ったように両親は喜び、退院をせがまれ、已む無く退院するのです。

郷里に戻り、線香工場に就職し、大楓子油を打ちながら、この注射が当時唯一の治療薬で、注射はとても痛いそうです。注射の跡から人に気付かれるのではないかと気の休まらない脅えた日々を送っています。だんだん、復生病院の思い出も、洗礼の感激も忘れ、自暴自棄になり、刹那享楽に、酒を飲み、女と遊ぶ日々には堕ちていきました。

数え二十歳の春、徴兵検査を受け、当然体の異常を発見されて落ちてしまいました。家にも帰られず、誰にも告げず自殺行に出ます。薬を用意して飲みましたが苦しくて吐き出してしまい、死に切れず、人に捕らえられるように全生園に收容されるのです。それが昭和八年四月二一日のことでした。その後、同病の妹に、心配しないでこちらに来るようにと手紙を書き、二週間後に妹、立子もここに入ります。そのとき妹立子は、「全生園に入って、兄は明るくなっていた」と感想を述べています。当時、全生園では、治療費を自分で収める 相談所患者 と、東條のように隔離されて入る 一般寮舎 とがありました。東條が收容された同じ年のひと月早く、昭和八年三月に、相談所患者として、光岡良二が東大二年を休学にして、入院しています。園内では相互扶助ということで作業が強いられていましたが、東條は当時最も重労働と言われ、やり手のなかつた不自由者棟や精神病棟の付き添い夫を失明するまでずっとしています。

園内では、文芸活動が奨励されており、「山桜」は大正八年に創刊され、ずっと月刊されてきていました。文芸特集号として選者による選考も随時あり、特に、詩は佐藤重信というすばらしい指導者が昭和七年頃から作品を読み、講評を出しています。佐藤重信は「詩の哺育者」と呼ばれ、東條は佐藤重信の指導のもと、癩という最も過酷な受難を自ら癒すための自己表現として詩を習得していったのだらうと思えます。

そして、東條が全生園に入った一年一ヶ月後の、昭和九年五月十八日に、相談所患者として北條民雄が入ってきます。北條と東條、この名前の近い如く、北條は日記に東條のことを「いのちの友」と呼んでいます。東條にとってもそれは同じこと、ふたりは決定的な宿命の出会いをしているのです。光岡良二は、「いのちの火影」で、東條について次のように書いています。

東條耿一は、同じ病で兄の入院していた富士岳麓の神山復生病院に少年時を過しており、そこで身につけた西洋的なミッション病院の情感と、郷里の

下野の荒々しい野生を身体の中にひそめた、無口で、はげしい青年で、来た頃は絵、音楽、詩、何にも手をつけ、器用であった。彼は妹と前後して入院してきた。北條と最も親交を結ぶことになったのは彼であった。直情的な気性のはげしさと、虚無的な心情、そうした二人に共通したものが彼らを結びつけたのだろう。(中略)彼は病勢が早く進み、盲人になるに及んで、少年時に植えつけられたカトリック信仰に入ってしまった。

昭和十年に、北條民雄を中心とする「文学サークル」が結成されます。内田静生、東條準(東條耿一)、十条號一(北條民雄)、岸根光雄(光岡良二)、於泉信雄、フモト・カレー(麓花冷)の初め六人集として結成されるが、すぐに、北條の傲慢な態度にそりが合わず、フモト・カレーが抜けて五人集になったようです。昭和十一年二月号「文学界」に、川端康成の推薦で北條民雄の「いのちの初夜」が掲載され、大きな反響があり、北條は、その年の文学賞を取るのです。そのことで、全生園では、一層文学に熱が入り、東條にとつて最も充実しており、全生園に於いても、文学の花が咲いた、二、三年間だったと思えます。東條は、昭和十一年に妹立子の親友、文子と結婚をしています。当時全生園では女のもとに男が通う通い婚でしたから、妹は、男女のそうしたことに戸惑ったようですが、やがて、それを通して急速に大人になったと回想しています。文子の人柄について、立子は、「貞淑でつましく、献身的に兄に仕えた。仕えるということは、この義姉の姿をさしているであろう」と言っています。また光岡は、「文子さんは、近代女性史のなかで著名な人の姪であった」と著書に書いています。しかしそれ以外のことは、文子について、生年月日も、亡くなった日も、一切の記録が全生園に残っておりません。

東條は、目に絶望的な悩みをもっていました。失明すれば、文学を諦めなければならぬ。詩を書くことは、生きることでもあった当時の東條には、詩が書けなくなるということは死に等しかった。文子に結婚を断られると死ぬしかない、北條に心配をかけています。そうして、東條は文子と結婚したのです。文学的には、東條は、三好達治に私淑しており、昭和十二年に、一時、三好達治の同人誌「四季」に、詩「靄」、「樹樹ら悩みぬ - 北條民雄に贈る」が掲載されています。しかし、三好達治との間に感情的な何かがあり、東條はすっかり失意し、投稿を止めてしまします。

北條が亡くなったのが、昭和十二年十二月五日です。北條が生前書いていた日記は、お互いに日記を見せ合ってきた、東條に預けられたのです。しかし、川端康成から「北條民雄全集」を編むので、遺稿を全部すべて送るようという要請を受けるのです。北條の日記は、大学ノートに書かれた「全生日記」と昭和十二年の最晩年に書いた「柊の垣にかこまれて」という当用日記がありました。全集が編まれた時、その当用日記のみ、その筆跡が違うことが謎になっていました。それは、東條が筆写して、検閲を逃れるために、文子の父親に託し、川端康成に郵送された為だったのです。その日記には天皇批判も書かれており、それが検閲されれば没収は必然であり、北條民雄全集という企画も、川

端康成先生にも災禍が及んでしまふ、それを東條は恐れたのだと思います。北條の文学を守ってやりたい、この日記を是非にも遺しておきたいという東條の計らいから筆写したものとされます。それだけではなく、心情的に、北條の直筆のものを遺品として、東條の身近にどうしても残しておきたかったのかもしれません。何しろ、北條の遺骨のかけらを箱に入れて、東條は身近においていたほどなのです。いのちの友を失い、眼疾の進むなか、その後、東條がどのような作品を生み出したのか、作品をどうぞじつくりお読み頂きたいと思えます。北條亡き後の東條には、文子だけがいのちの繋ぎ目だったのではないかと思ふのですが、その文子がいつ亡くなったのか、妹さんの、書かれています。文章によって違ってきますので、苦慮しておりますが、東條の作品からして、昭和十五年に亡くなったのではないかと思えます。

妻文子をも失った東條は、最晩年、すべての、詩も絵も、焼いて灰にしてしまいました。北條民雄の日記は残りましたが、東條の日記は読むことが出来ません。ここに編集しました東條耿一の詩は「山桜」などに残る刊行物から収集したものです。そして東條は、カトリックに深く帰依し、信仰ひとすじに、昭和十七年のきょう、九月四日に帰天しました。昭和十六年「山桜」二月号に「枯れ木のある風景」という難解な詩のあと、一篇の詩も書かず、昭和十七年「山桜」の十一月号に遺稿「訪問者」が載っているのです。

東條耿一詩集の構成

東條環名の作品

昭和十年	
病床・断片	(山桜一月号)
雪達磨(童謡)	(山桜二月号)
林檎(小曲)	同
やくざ節峠の唄	同
病床哀戀賦	(山桜五月号)
大境の子守唄	同
想い出	同
野道	(山桜六月号)
愛人の歌	同
春の悲歌(小曲)	同
郷愁譜	同
春雨戀慕抄	(山桜七月号)
忍従の謝肉祭(カア二ハル)	同
合 圖 (民謡)	同

乳房

(山桜八月号)

白鳩に寄す (小曲)

同

Chocolateのゆふぐれ

(山桜九月号)

ねがひ(小曲)

同

酸漿の詩

(山桜十月号)

ひめごと(小曲)

同

子供

(山桜十一月号)

槍

(山桜十二月号)

花言葉(小曲)

同

昭和十一年

たそがれの魔術師

(山桜一月号)

病猿の詩

(山桜二月号)

葬列

(山桜三月号)

散歩

(山桜六月号)

東條耿一名の作品

桐の花

(山桜九月号)

傷

(山桜十月号)

ゆふぐれ

同

昭和十二年

青鳩

(四季一月号)

雨後

(山桜一月号)

初春のへと 俗物の歩み牛の如し

(山桜二月号)

少年

(山桜二月号)

靄

(四季二月号、山桜三月号)

望郷臺

(文学界二月号)

椰子の実

(山桜三月号)

誕生

(山桜五月号)

舞踏聖歌

同

霧の夜の風景に詠める歌

(山桜六月号)

鞭の下の歌

同

伴侶

同

心象スケッチ

(山桜七月号)

別れて後に

(山桜八月号)

夕雲物語

(山桜十月号)

晩秋

同

樹々ら悩みぬ

北條民雄に贈る―

(四季十一月号)

国旗

（山桜十二月号）

昭和十三年

元旦スケッチ集

（山桜一月号）

木枯の日の記憶

同

念願

（山桜九月号）

夕雲物語 その二

（山桜十月号）

孟蘭盆

同

昭和十四年

朝霧（短歌）

（山桜一月号）

友を祝し給はずば

（山桜二月号）

明日への言葉

（山桜三月号）

望郷臺（奮作として）

（山桜四月号）

白鳥

（山桜四月号）

微笑の詩

（山桜五月号）

一椀の大根おろし

（山桜九月号）

おもかげ

（山桜十月号）

木魚三題

（山桜十二月号）

昭和十五年

小説「霜の花」 文藝特集号

療養日記 爪を剪る

（山桜一月号）

閑雅な食欲 療養日記その三

（山桜二月号）

器

（山桜三月号）

奥の細道

（山桜六月号）

義父房州の果實をたまふ（短歌）

（山桜九月号）

散華

（山桜十一月号）

静秋譜（短歌）

同

蜻蛉譜（短歌）

（山桜十二月号）

昭和十六年

天路讃仰

（山桜一月号）

枯木のある風景

（山桜二月号）

昭和十七年

遺稿 訪問者

（山桜十一月号）

第一部 東條耿一と北條民雄

北條民雄の日記より(昭和十年七月)

七月十四日。

お盆が来た。降るのかと思はれる程空は曇ってゐる。昨年の盆と同じやうに、やはり今年も涼しい。学園前のグラウンドには、大きなやぐらが建てられ、夜が来ると、みなめいめいに仮装などして踊りだ。八時頃出かけて行く。けれど踊りたいといふ心は湧いては来ない。望郷台に上ると、ほの暗い中に東條が住んでゐる。大きな花の輪を鳥瞰するやうに、踊りはすぐ真下に見える。初めて自分がこの踊りを見た時は、土人の部落の踊りでも見るやうな感じがしたが、今年もやはりそのやうな気がする。東條と二人で降り、ぶらぶらと散歩をする。月は満月で碧い硝子玉のやうに中空に浮んでゐる。東條は突然僕に、自殺の決意を告白する。遂にここまで来てしまったのか。僕は心の中に突き上つて来る激しいあるものと戦ひながら、それでも言ふべき言葉がない。彼が死を思ふことは既に久しい。そしてここに至ることは最早以前から予想されてゐることではないか。この彼に向つて自分は何と言つたらいいのだ。自殺をやめると言ふか。ああ、だが今の僕にどうして彼の死を思ひとどまらせることが出来るのだ。それどころか、真に彼の苦しみを思ふなら、むしろ死を奨めるべきではあるまいか。人は何と言ふか僕は知らぬ。けれど僕にはさうより以外言ふ言葉がない。けれど、ああ、東條に向つて、この親友といふべきだった一人の友に向つて、どうして死ねと言へるのだ。どうしても、どうしても僕には言へない。「僕には何とも言ふべき言葉がない。」僕はただそれだけを言つて置いた。これ程無慈悲な言葉はあるまい。死ね、と言ふよりも尚数倍冷たい言葉であらう。けれど、この冷たさが、この無慈悲さが、どんなに彼を思ふ僕の心か、誰か察して呉れ。僕自身何かの折に幾度も言つたではないか。盲目になつたら、いや、盲目になる前にきつと自殺する、と。この僕だ。この僕の考へを彼は今行はうとしてゐる。それは誰の姿でもない、僕自身の姿なのだ。彼は又言ふ。或る女性に結婚の申込みをしたと。その女は幾分かは文学に対して理解を持つてゐるらしい。言ふ迄もなく盲になつてから代筆して貰ふ為だ。その返事が今日は恐らくあるだらうと思ふ。その女の返事によつて死ななくてもよいかも知れぬと彼は言ふ。けれど九十%駄目だらうと言ふ。つまり彼の生死はその女の返事一筋にかかつてゐるのだ。僕は言つた。もしその返事がノーであった場合はどうかその女と僕と会はせてくれと。僕は下手な口でその女を必死になつて口説いてみよう。しかし僕が女を口説くなんてなんだか変な感じがする。僕は生れて初めてだ。

七月十八日。

夕刻まで部屋に引き籠ってみて、随筆五枚書く。『山桜』にでも発表しようと思つて書き始めたのだが、書き終ると嫌になつた。五時頃東條の所へ風呂を貰ひに出かける。女からはまだ返事がないと言ふ。けれど今夜は間違ひなくある筈だと言ふ。勿論イエスカノーか判らぬが、僕はなんだかイエスのやうに思へてならない。イエスであつて呉ればいいが。

家に帰つてY君とM君との棋を見てみると、東條がのつそり来る。もう八時過ぎであつた。彼の姿を見た刹那、返事があつたなと思ふ。二人で散歩。返事は、僕の予想が的中してイエスであつた。ほつと安心する。彼はしみじみ君に心配かけて済まなかつたと言ふ。そんなことより僕には、無事に解決したことが嬉しいのだ。けれどこのままうまく彼が起き上つて呉ればいいが、又再び新しい苦難が彼の前に立ちはだかつて来るのではあるまいか、さういふ不安が僕の心を離れない。

「今後もどんな苦しみも君の前にやつて来るか判らない。けれどかうなつた以上は、もし君が絶望すれば、君だけでなく、新しくその人も苦しまねばならないのだ。もはや苦しみは君個人のものでは決してなく、君の苦しみは彼女の苦しみであると思ふ。だから戦つて呉れ。『盲目』はどうしても書き上げろ。」と彼に自分は言つた。彼は力強くうんと一言つた。僕はこの時程彼を頼母しく思つたことは嘗てなかつた。九時頃彼の所へよると、T・N君とT・K君が来てゐた。T・N君やT・K君が帰つた後で二人でお茶を飲み、心から彼の婚約を祝つた。淋しいしかし力の満ち寄せるよろこびが心にある。そこで泊る。

臨終記 北條民雄の最期を看取つた東條の手記

彼（北條民雄）が昭和十二年九月の末、胃腸を壊して今年二度目の重病室入りをして以来、ずっと危険な状態が続いて来たが、こんなに早く死ぬとは思はなかつた。受持の医師が、私に、北條さんはもう二度と立てないかも知れません。と云はれたのは彼が死ぬ二十日ばかり前の事であつた。私はその時はじめてそんなに重態なのか、とびつくりする程迂闊に彼に接してゐたのである。来る春まではまあむづかしいにしても、正月ぐらゐは持越すものと信じてゐた。それほど彼は元気で日々を送り迎へてゐたのである。彼にしても、こんなに早く死が訪れようとは思はなかつたに違ひない。尤も死期の迫りつつあることは意識してゐたらしく、その頃の日記にも、「かう体を悪くしたのも、元を質せば自ら招けるものなり。あきらめよわが心。けれど、かう体が痩せてはなんだか無気味だ。ふと、このまゝ病室で死んでしまふやうな気がする。」また重態の日々が続いた後であらう、苦悶の様が書かれてゐる。「しみじみと思ふ。怖い病気に憑かれしものかな、と。慟哭したし。泣き叫びたし。この心如何にせん。」その頃が最も苦しかったらしく、また、死との闘争も激しかったやうに見受

けられた。私にも、おれはまだ死にたくない、どうしても書かなければならぬものがあるんだ。もう一度恢復したい。と悲痛な面持で云った事もあった。彼は腸結核で死んだのである。彼は最後の瞬間まで、哀れなほど実に意識がはつきりしてゐた。文字通り骨と皮ばかりに痩せてはゐたが、なかなか元気で、便所へなども、死の直前まで歩いて行ったほどである。その辛棒強さ、意志の強靱さは驚くばかりであった。それでも死ぬ三四日前には、起上るにも寝返りするにも、流石に苦痛を覚えたらしく、私が抱起してやるとほっとしたやうに、さうして呉れると助かるなあ、と嬉しげであつた。寝台が粗末で狭いので、痩せこけてゐる背中のあたりが悪く、刺さへ蒲団が両脇に垂れ下がり、病み疲れた体にはその重量がいたく感じるらしく、よく蒲団が重いなあ・・・と苦しげに咳いた。私が蒲団を吊つてやらう、と云ふと、彼は俄かに不機嫌になつて、ほつといて呉れ、君、ここは施療院だぜ。施療院の、おれは施療患者だからな。出来るだけ忍ばにやらんよ。それに蒲団を吊ると重病人臭くていかん。と怒つたやうに云ふのであつた。平素の彼が、全く我儘無軌道ときてゐるので、こんな時、思ひがけなく彼の眞の姿に触れ、たじたじとさせられる事がよくあつた。

来る日も来る日も重湯と牛乳を少量、それも飲んだり飲まなかつたりなので、体は日増に衰弱する一方であつた。食べる物としては他に何も無いのであつた。流動物以外の物を一寸でも食べようものなら、直ちに激しい痛みを覚え、下痢をするらしかつた。彼はよく、おれは今何もいらん。只麦飯が二杯づゝ食ひたい、そのやうになりたい、と云つた。創元社の小林さんからの見舞品も、殆ど手をつけなかつた。尤も、これはおれの全快祝ひに使ふんだ、と云つて、わざわざ私に蔵はせて置いたのである。

それらの品々は悲しくも、お通夜の日、舎の人達や私達友人の淋しい茶菓となつた。彼はまた口癖のやうに、こん度元氣になつたら附添夫を少しやらう。あれはなかなか体にいい、やつぱり運動しなげや駄目だ。まづ健康、小説を書くのは然る後だ、と云つて、よくなつてからの色々のプランを立ててゐた。そんな時の彼は恢復する日を只管待ち侘びてゐたらしく、また必ず恢復するものと信じてゐたやうであつた。小説はかなり書きたいやうだつた。君、代筆して呉れ。と云つたり、ああ小説が書きたいなあ・・・と悲しげに咳く事などもあつた。じつと寝たなりで居るので色々な想念が雲のやうに湧いて来るのであらう、おれは今素晴らしい事を考へてゐた。世界文学史上未だかつて誰も考へた事もなく、書いた者もない小説のテーマなんだと確信ありげに云ふ事もあつた。病氣によいといふ事はたいしていやつてみてみたらしいが、たいして効果は無かつたやうだつた。時には変つた療法を教へたりする人があると、真向から、そんなものは糞にもならん、あれがいいこれがいいと云ふものは凡てやつてみたが、却つておれは悪くした。結局、病人は医者にいのちを委せるより他ないんだ、と喰つて掛る事もあつた。

死ぬ二三日前には、心もずつと平静になり私などの測り知れない高遠な世界に遊んでゐるやうに思はれた。おれは死なご恐れはしない。もう準備は出来た。

只おれが書かなければならないものを残す事で心残りだ。だがそれも愚痴かも知れん、と云ったのもその頃である。底光りのする眼をじつと何者かに集中させ、げっそり落ちこんだ頬に小暗い影を宿して静かに仰臥してゐる彼の姿は、何かいたいたしいものと、或る不思議な澄んだ力を私に感じさせた。私は時折り彼の顔を覗き込むやうにして、いま何を考へてゐる？ と訊ねると何も考へてゐない、と答へる。何か、読んでやらうかと説くと、いや何も聞きたくない、と云ふ。静かな気持を壊されたくないものであらう。

彼の死ぬ前の日。私は医師に頼んで、彼の隣寝台を開けて貰つた。夜もずつと宿つて何かと用事を足してやる為であつた。私が、こん晩から此処へ寝るからな、と云ふと、さうか、済まんなあ、と只一言。後はまた静かに仰向いてみた。補助寝台を開けると、たいていの病人が、急に力を落したり、極度に厭な顔を見せたりするのであるが、彼は既に、自分の死を予期してゐたのか、目の色一つ動かさなかつた。その夜の二時頃(十二月五日の暁前)看護疲れに不覚にも眠つてしまつた私は、不図私を呼ぶ彼の声にびっくりして飛起きた。彼は瘦せた両手に枕を高く差上げ、頻りに打返しては眺めてゐた。何だかひどく昂奮してみるやうであつた。どうしたと覗き込むと体が痛いから、少し揉んで呉れないか。と云ふ。早速背中から腰の辺を揉んでやると、いつもは一寸触つても痛いと言ふのに、その晩に限つて、もつと強く、もつと強くと云ふ。どうしたのかと不思議に思つてみると、彼は血色のいい顔をして、眼はきらきらと輝いてゐた。こんな晩は素晴しく力が湧いて来る、何処からこんな力が出るのか分らない。手足がびんびん跳ね上る。君、原稿を書いて呉れ。と云ふのである。いつもの彼とは容子が違ふ。それが死の前の最後に燃え上つた生命の力であるとは私は気がつかなかつた。おれは恢復する、おれは恢復する、断じて恢復する。それが彼の最後の言葉であつた。私は周章てふためいて、友人達に急を告げる一方、医局への長い廊下を走り乍ら、何者とも知れぬものに対して激しい怒りを覚えバカ、バカ、死ぬんぢやない、死ぬんぢやない、と咳いてゐた。涙が無性に頬を伝つてゐた。彼の息の絶える一瞬まで、哀れな程、実に意識がはつきりしてゐた。一瞬の後死ぬとは思へないほどしつかりしてゐて、川端さんにはお世話になりつぱなしで誠に申訳ない、と云ひ、私には色々済まなかつた、有難う、と何度も礼を云ふので、私が何だそんな事、それより早く元氣になれよ、といふと、うん、元氣になりたい、と答へ、葛が喰ひたい、といふのであつた。白頭土を入れて葛をかいてやるとそれをうまさうに喰べ、私にも喰へ、と薦めるので、私も一緒になつて喰べた。思へばそれが彼の最後の会食であつた。珍らしく葛をきれいに喰つてしまふと、彼の意識は、急にまるで煙のやうに消え失せて行つた。かうして彼が何の苦しみもなく、安らかに息を引き取つたのは、夜もほのぼのと明けかかつた午前五時三十五分であつた。もはや動かない臉を静かに閉ぢ、最後の訣別を済ますと、急に突刺すやうな寒気が身に沁みた。彼の死顔は実に美しかつた。彼の冷たくなつた死顔を凝視めて、私は何か知らほつとしたものを感じた。その房々とした頭髪を撫で乍ら、小さく北條北條と咳くと、清浄なものが胸元をぐつと突上げ、眼頭が次第に曇つて来た。

彼が死んではや二週間、その間お通夜、骨上げ、追悼と、慌しい中に過ぎ、いま彼の遺稿の整理をし乍ら、幾多の長篇の腹案に触れ、もうあとせめて五六年、私の生命と取替へても彼を生かしてやりたかった、としみじみとした思ひがした。残り妙ない彼の日記を読んでみるうちに、ふと次の詩のやうな一章が眼についた。彼のぼうぼうとした寂寥と孤独、その苦惱の様がほほ窺はれるやうな気がするので、此処に引用する事を許して戴き、心から彼の冥福を祈りたい。

粗い壁

壁に白弄ぶちつけて

深夜、

蛇が羽博いてる。

(昭和十二年十二月記)

第二部 東條耿一詩集より

酸漿の詩

ほほづき、ほほづき

そは圓らなるかの赤きメノウ

はた麗はしきかの珊瑚。

われ、その美しさに魂こころうばはれ

その麗はしさにそと接吻くちくちけみて

ああ かくも手痛き

そが苦味を知れり。

されど

われいまだ若く人の世の

まことの憂さを知らず

沁々とその苦味を忘れ得ず。

ほほづき、ほほづき

そは赤く、苦き

はた忘れ得ぬ、思い出の苦味

ああ、さればわれ

ほほづきの

その苦味を愛ず。

(昭和十年「山桜」十月号)

槍

私の恐迫観念症より

ごろりと横になると定つて

私の腹を狙ふ鋭どい槍がある

何處の誰奴どやつがどう狙ふのかは知らないが

研澄とまされた穂尖とがピカリ

ピカリ 空間に閃き

見えない、そ奴の、殺気立つた眼が

凝乎と私の腹を凝視しているのだ

私はもう怖ろしさに全身がおのゝいて

無我夢中に跳起きやうとするのだが

一寸でも動いたら、その瞬間!!

槍は私の腹を貫ぬくだらう。

全身の何處が痛んでも

腹にぐつと力を入れて耐えるものなのに

その腹を突尖されて

一體、何處で痛みに耐へよう

槍は秒速の隙も興へず、チリ、チリと

私の腹を狙つて

近寄り

遠退き

尚もギラギラと空間に閃いてゐる

私は何に縋ろう、誰の力を求めよう

然し、幾ら悶搔いたとて、齒痒んだとて

この場合どうなるものか

私は悲しく諦めて静かに眼を閉じる

悲しくも諦観し、眼を閉じれば

おお、ありありと

名も知らぬ美しい花が咲いて繞る

仄かなるその香が馥郁と私を包んでめぐる…

おお、繞る……

(昭和十年「山桜」十二月号)

伴侶

義足よ つれづれの孤独の伴侶私とせに力を借せよかし

人生ひとのよの片影 そを安らかに歩むより 私に想望おぼせふ事もなし

いまこそ疵も癒ゆたれば お前に学び 歩きたい

向ひの病室 あちらの花芥こがら 風の泳ぐ芝平ら

(昭和十二年「山桜」六月号)

リノリウムには先刻から朝日が溜つたり跳ねたりしてゐるのに、いくら揺り起してもお父さんの返事がない。よつぼど眠いのだらう。と暫く枕頭で待つてゐると、附添夫は黙つて眠つてゐるお父さんを擔荷に乗せ、解剖室へ連れて行つてしまつた。一體なにごとが起きたんだらう、と蟻子は小さい胸を痛めたがいつの間にもやら忘れて遊び呆けてしまつた。夕方になつて不圖思ひ出し、解剖室へ行つて重い扉の隙間からそつと覗いて見ると、確かに台の上に寝てゐた筈のお父さんの姿が見えず、そのかはり片隅に白木の大きな箱がちよこなんと坐つてゐる。それならきつと何處かへ用事に行つたんだらう。とその日は歸つて寝てしまつた。翌る朝。お父さんのお骨上げですよ。と保母さんに連れられお友達と一緒に來て見たが、火葬場にもやつぱりお父さんの姿は見えない。さては廁の中へでも墜ちてゐるのか知ら。と眇からず心配した。見ると保母さんもお友達もみんなしくしく泣き乍ら灰皿のきれいに焼けた骨がらを拾つてゐるので、ではお父さんは本當に死んでしまつたのかも知れない。と始めて悲しくなつたが、心の中ではきつと何處かに隠れてゐるに違ひない、さうして不意にわたしを、吃驚させるお積りなんだわ。と考へられ、手にする骨がらも貝殻のやうに美しく見えてくるのだつた。

歸つてから病室の廁の中も捜して見たが墜ちてはゐない。これはいけないぞといよいよ心配になり、それから思ひ出す度に病院ぢうを尋ね廻るのだつたが、お父さんは何處にも見えず、彼女はしみじみひとりぼつちになつたことを感じ、淋しくなるばかりであつた。

ある日。望郷台へのぼつて西の空いつぱいに流れてゐる夕雲を見てゐると、雲の形がさまざまに變つてゆくので、すつかり面白くなって見惚れてゐた。子どもを抱いたヒグマになつたり、お伽噺に聞いた海の中のお城に見えたかと思ふともう青い堤の向うに耳だけ出して隠れたつもりでゐるらしい兎になつたり

した。はては人の様になり、優しい眼まで出来てそれは次第に誰かの顔に似て来た。蟻子は思はず、お父さんだ。と叫んで、まがった指も伸びてしまふほど空いつばいに両手を上げた。雲の中に隠れてしまったんだもの、いくら尋しても分らない筈だった。と思ひ、それにしてもどうしてあんな所へ行つてしまつたのだらうと不思議になつた。すると、急にお父さんとの間に遠いとほい距離を感じ、お父さんのバカ、お父さんのバカ。と小さく咳いた。あまつさへはるか彼方の山脈の上に一つ星がきらきら耀きそめると、望郷台にはせうせうと冷たい風が流れ出し、やうやく見つけたお父さんの姿も見てゐるうちにひつそりと灰色の闇の中に沈んでしまつたので、蟻子はとうとう聲をあげて泣き出した。

(昭和十二年「山桜」十月号)

夕雲物語 その二

落葉を踏んでふたりは歩きました。やはらかに肩を組合つて愉しいのでありました。さうして天の刑罰でこんな病に罹なつたのだとは少しも思はないのでありました。二つの魂が歩む度に、落葉が小さな旋風をあげて足下を駈けまわつてゐました。空は痛いほど青く澄んで、すっかり坊主になつた林の向うから犬が啼きました。それが空の中で啼いたやうに思はれるのでありました。

わう、わう、わう、ばう……

男は口をすぼめて啼真似ながら、林の向うへ挑むのでありました。それは空の青に輝がはいるやうに思はれました。すると、林の向うからは前よりも激しく食つて掛るのでありました。それはどうやら空から落ちてくるやうでした。

わう、わう、わう、ばう……

男は面白くなつて、負けずに林の向うへ啼き返すのでありました。それはやつぱり空の青に輝がはいるやうでした。あなたお止しなさいよ 女は微笑みながら、林の向うへ首をかしげ、男の肩をそつと抓りました。男の啼声が早く

なると、林の向うでも早くなりました。林の向ふから思ひ出したやうに飛んでくると、男の方でも急いでそれに相槌を打ちました。さうして女の間のびた足が、道端の堆肥を丁寧ていねいにさらつた時、始めて男の啼声なげなが途中でひつ切れました。その煽りあおりで、落葉らくえつがながいことふたりの周囲をくるくるくる廻つてゐました。女は美しい盲くらでありました。詰らなくなつてやめたのか、林の向うは静かになつて、いつの間にか、輝あざのはいつた空から、美しい夕雲ゆふぐもが覗のぞいてゐるのでありました。

(昭和十三年「山桜」十月号)

望郷臺

故郷ふるさとよ 故郷よ 私の向いた方向に お前は居るのか
いや居るに違ひない 幼い頃に別れたなりで
私はお前を覚えてゐない ああ 病んでゐる身の逢ひには行けず
呼ばば訝あやは返つて来るが 羨としいぞよ 紅蜻蛉

(昭和十二年「文学界」二月号)

樹々ら悩みぬ

北條民雄に贈る一

月に攀のぼぢよ 月に攀のぼぢよ
月に攀のぼぢよ 樹樹じゅじゅら 悲しげに 身を顛たふはせて咳せききぬ
蒼夜そうやなり
微塵みじんの曇くもりなし
圓まるやかに 虔まごしく 鋭とく冴さえ
唯ただひとり 高く在あせり

月に攀のぼぢよ
月に攀のぼぢよ

樹樹ら 手を取り 額をあつめ
あらはになりて 身を顛ふ
されど地面にどつしりと根は張り
地面はどつしりと足を捉へ

(悲しきか)

(悲し)

(苦しきか)

(苦し)

樹樹らの悩み 地に満ちぬ
彼等はてもなく 呼び應ふ

ああ月に攀ぢよ

月に攀ぢよ

樹樹ら 翔け昇らんとて

翔け昇らんとて 激しく身悶ゆれど

地面にどつしりと根は張り

地面はどつしりと足を捉へ

(昭和十二年「四季」十一月号)

一 椀の大根おろし

初夏の宵なり

病み疲れた寝臺に起出でて

ほろ苦き一椀の大根おろしを喰らふ

肌あらし病衣に瘦軀を包み

ぼつたりと重き繃帯フョークに肉又を差込み

わたしはがつがつと大根おろしの一椀を喰らふ

思へば病みてより早や幾とせ

げにこれまで生きながらへて来たるものかな

一驚を喫す 一驚を喫す

見よ、己が姿かけを

而して思ひをなせ

日夜 病菌の裡に住へど

かくいのちの在るは嬉しからずや

貧しき一椀の大根おろしを愛ずるは幸ひならずや
われとて何時の日か
父の御許に帰り行くらん
なべてはそれまでの愛の十字架
ああ忘れ得ぬ人の世の一事ならずや
さらば 喰らはん 餓鬼の如くに喰らはん
大根おろし 大根おろし
涎と汁とそして涙と
ああ初夏の宵の一椀の大根おろし・・・

(昭和十四年「山桜」九月号)

静秋譜

凭りてをる老松の幹ひえびえと向つ杉原片日照りせり
藟^{はが}棒^{さき}の尖端^{さき}に小鈴^{さき}をつけむ小禽^{さき}来て宿らば忽ち呼^へ鈴^るとならむか
わが眼^{とさか}はや十尺^{あま}前方^りはおぼつか^はな藟^{はが}棒^{さき}の小鈴^{さき}の鳴りをし思ほゆ
一枚の木の葉の如くぶらさがり繡眼^{さき}兒は繟^{さき}に驚かずをり
眼の縁に白きテープを巻きてをるこの小禽^{さき}はも掌^{さき}に愛^おし

(昭和十五年「山桜」十一月号)

天路讃仰

ゆつくり遠くまで

原田嘉悦兄へー

ゆつくり
遠くまで行かうよ
息を切らさないやうに
行路病者にならないやうに
足下の覚束ない夜があれば
一望千里、輝く朝もあるであらう
焦らず、迫らず
恒に、等分の力を出して
扨て、ゆつくり
遠くまで行かうよ

愛は惜しみなく奪ふ

あますなく欲りし給へば
惜しみなく捧げざらめや
我が最も小さな
喜びや
悲しみや
はた苦しきもまた・・・
君ゆゑにわれは生き
君ゆゑにわがいのち
永久とこしへに誓よき匂ひ放てり

郷愁

君が面輪つねにはつきりとわが裡に住まひ
君がみ聲絶えず凜々とわが裡にひびかひ
君がみ心限りなくわれをつゝめば
ああ故郷ふるさとは讃むべきかな
こよひ、晩鐘の彼方
夕映えの空を拜して
心しみじみ思ふかな
嗚呼君がみ心に生きばやとこそ・・・

死

そんなに私が可愛いと云ふなら
さあお前の腕に力をこめて
もつと、しつかり、私を抱擁しておくれ
お前は善良なる同居人、親愛なる友
さうして私の忠實なる僕よ
お前が、恒に、傍に居てくれるゆゑ
愚かな私も、どうやら怠け者にならずにすんでゐる
噫、やがて私の生涯が終る時
私はお前の媒介で
み父の前に、輝く花婿になるのです

訪問者

我門前に立ちて敲く、我声を聞きて我に門を開く人あらば、我其内に入りて彼と晚餐を共にし、彼も亦我と共にすべし。 黙示録

第一篇 怯懦の子

こつ、こつ
こつ、こつ……

誰人ぞ今宵わが門を叩く者あり
日は暮れて、凜寒く吹き悩む

こつ、こつ
こつ、こつ……

われ深く黙して答へず
半ばを過ぎし書を読みつぎぬ

こつ、こつ
こつ、こつ……

訪へる声やまず続けり
凜はいよよ募る

われ炉に薪を投げ入れ
尚も黙せり、耳を覆ふ……

こつ、こつ
こつ、こつ……

旅人よ、何とてわが門を叩く
りょじん

われに何をか告げむとするや
われ知らず、わが扉開かざるべし

……
旅人よ、わが門を過ぎよ
わが隣にも人の子は在り

こつ、こつ
こつ、こつ……

噫旅人よ、執拗なり
われは沈黙の人、孤独を愛す
われは聞くを好まず、聞かざるを欲す

われをして在るべき所に在らしめよ
……旅人よ、とくわが門を過ぎよ
しかして汝に受くるものに尋ねよ

こつ、こつ
こつ、こつ……

旅人、汝呪われてあれ
何ぞわれに怨みを持つか
如何なれば斯くもわれを求め

如何なれば斯くもわが安居やすらひを亂すや

汝に向ひ、外に開かむより
われは寧ろわが裡に死ぬるを望む

……旅人、汝わが門を行け
われは蝮の裔にして汝を噛まむ

こつ、こつ
こつ、こつ……

おお夙よ募れ、闇また来たれ
われ汝を呪はむ
汝、如何に叩くとも

わが扉は固く、朝に至るも閉さるべし
われは汝を知らず、われは汝に聞かず
さなり、われは己に生くるなり

……噫旅人、とくわが門を去れ
然らずば人の子汝を渡すべし

第二篇 訪問者

吾子よ、吾なり、扉を開けよ
汝を地に産みし者来たれるなり
吾、はるばると尋ね来るに
汝、如何なれば斯く門を閉じたる
吾子よとく開けよ
外は暗く、夙はいよよ募れり

噫父なりしか
父なりしか、宥せかし
おん身と知らば速やかに開きしものを

噫何とてわが心かくは盲ひ、かくは聾せり
わが父よ、しまし待たれよ
わが裡はあまりに乏しく
わが住居あまりに暗し
いとせめて、おん身を迎ふ灯とな点さむ

これ吾子よ、何とて騒ぐ
吾が来たれるは
汝をして悲しませむとにはあらで
喜ばさむ為なり
吾が来れば
乏しくは富み、そが糧は充たされるべし
吾久しく凧の門辺に佇ちて
汝を呼ぶことしきりなれば
吾が手足いたく冷えたり

噫わが父よ、畏れ多し
われおん身が、わが門を叩き
われを求むを知り得たり
されど、われ怯懦にして、おん身を疎み
斯くは固く門を閉したり
噫おん身を悲しませし事如何ばかりぞや
われ如何にしてお宿しを乞はむ
さはれ、われは伏して、裡に愧づなり
わが父よ、いざ来たりませ

吾子よ、畏るゝ勿れ
非を知りて悔ゆるに何とて愧づる
夫れ、人の子の父、いかでその子を憎まむ
吾今より汝が裡に住まむ
汝もまた吾が裡に住むべし
父よ、忝けなし
われ、何をもておん身に謝せむ
わが偽善なる書も、怯懦の椅子も
凡て炉に投げ入れむ
わが父よ、いざ寛ぎて、暖を取りませ

われ囚人めしうじんにして、怯懦の子、蝮へびの裔
おん身を凧の寒きに追ひて

噫如何ばかり苦しませしや

最愛の子よ、吾が膝に来よ
而して、汝が幼き時の眠りを睡れ

そは吾が睡り甘美あまければなり

われおん身を離し去らしめじ
わが貧しきを見そなはして

わが裡に住み給へば
われもまたおん身の裡に生きむ

噫いと永久しんに、われ、おん身の裡に生きむ

父よ、われをしてこの歡喜の裡に死なしめよ
父よ、われをしてこの希望の裡に生かしめよ

第三篇 癩者への接吻

わが園生のたそがれに
愛くしき者の訪ひぬ

幽かに匂ふ御衣の
さやかなるこそ貴けれ

遙るかにわれをみそなはし
近づき給ふ御気色の
いよよ気高くすゞるかに

われ御衣に触れみむと
心怪しく騒ぐかな

噫如何なれば斯くならむ
悲しきわが智消えうせよ

時は過ぎゆくわがなべに
なにとて御手を承ぐべしや

おん方われをみそなはし
訪ひ給ふこそ畏けれ

(心静かにわれをみよ
われのいづくに迷ひあり)

噫げに愚かなる僕かな
せめて御足を給ひかし

おん方笑ませ給ひつゝ
わが手を取りて貴しや
癩者の膿を吸ひ給ひぬ

(昭和十七年「山桜」十一月号)

第三部 東條耿一追悼

渡辺立子さんの回想記より

兄が東条耿一を名乗るようになったのは、北条さんが北条民雄を名乗ったのと同じ時期だった。兄が東で北条さんが北とつけたのは、どういう意味だったのでしょうか。考えてみたら、耿一という名も、北条さんの本名と深く響き合っている。北条さんが死んだあと、兄は北条さんの遺骨を小さな箱に分骨して、ずっと手元にもっていた。はやくにカトリックの洗礼を受けていたけれど、ずっと名前だけのナマクラ信者で、北条さんの死をさかいに、しだいに深い信仰生活にはいっていった。たくさん持っていた文学書を神田の古本屋に郵送して売り、新しく信仰書をどんどん買い込んで、祈りにあけられるようになった。やがて眼はとうとう見えなくなってしまうたけれど……。こころの優しい人だったから、眼が見えなくなるまでずっと精神病棟で付き添いの仕事をしていった。十号病室というその病棟に、北条さんもよくやって来た。精神を病んださまざまな人たちをそこで見て、北条さんは『間木老人』を書いたのだ。たしか日記のなかに、十号病室の兄の姿が書かれてあったと思う。

東条がA・Gの所から本箱を貰って来て盛んに本を並べ出した。半分く

らいは僕が呉れてやった本であるが、しかし彼は楽しそうに本を並べている。じっと見ているうちに僕はなんとなく涙ぐましいほど彼が気の毒にもいとおしく思われた。勿論、これといって値のある本は一冊もない。それでも彼は、右に置いて見たり左に立てて見たりしながら、なるべく立派に見えるように骨折っている。彼にはこうしたこと以外になんにも喜びがないのだ。あの狂病棟の一室で、毎日々々狂人達と共に暮しながら、その部屋を自分の部屋と定め、粗末な机と貧弱な小さな本箱を眺めては、豊かな喜びを味って詩を書いている彼。僕は今日ほど彼に友情を覚えたことはない。彼に本をやったことをこの上なく嬉しく思った。(日記・昭和十一年六月二十八日)

北条さんは、まだあの小さな書齋を手にいれてなかったころ、十号病室の兄の机で原稿を書いたこともある。兄は北条さんのおかげで、川端先生を通じて三好達治先生に詩を見てもらうようになったことを、無上の光栄として飲んでいった。光岡さんが『いのちの火影』の「文学仲間」の項で、兄がなにかのことで三好先生に喧嘩を吹きかけるようなかたちで師事するのをやめてしまったと書いているけれど、あれは事実ではない。三好先生に見ていただくために送った詩の原稿の批評を、なかなか聞かせていただけなかったので、兄が催促の手紙を出したところ、たぶん繊細な詩人の神経に触れてしまったのでしよう、三好先生からお怒りの葉書が送られてきた。ちょうど外から面会の人があつて、私はその場に居合わせたのだけど、兄は顔色を変えて、黙って考え込んでしまった。あのとこの兄の狼狽ぶりとは失望、落胆は可哀相なほどだった。すぐに兄は意を尽くしてお詫びの手紙を書き、三好先生からも了解した意味のご返事をいただいた。でも、それからなんとなく兄は、先生に批評をお願いするのを遠慮するようになつたのではないかと思う。昭和十二年に北条さんが死に、それから三年して文ちゃんも死んで、兄はひどく落ち込んでしまつて……。私は兄と文ちゃんの結婚を、内心では反対していた。通い婚というのが若い私には汚らしく思えて、考えるだけで身体中に悪寒が走るほどだったから。でも、私も文ちゃんに死なれた昭和十五年、渡辺と結婚したのだから、なんとはいえればいいのだろうか。

兄が死んだのは、それから二年後の昭和十七年九月四日のことだった。熱瘧が外に出ないで内攻し、強い薬を常用しなければならなかつたので、はげしい下痢を起こすようになった。それで腹膜を病んで、お腹が妊娠した女の人みたいに大きくふくれてしまつて、それだけならまだしも、痔瘻のために肛門のそばに穴があいて膿が絶えず流れでた。兄はそんな状態で一篇の詩を詠み、私に代筆してくれと言つた。あの緑の草原の上を素足で歩いてみたいそんなような意味の美しい詩だった。私は口述を書き留めながら、涙が流れた。いまはその詩の一節さえ憶えていないのが、悔やまれてならない。私が忘れられないのは、兄が死ぬ前夜のことだ。当直の美しい看護婦に兄は、「苦しくて眠れないから、眠れる注射をしてください」と言つた。すると彼女は、「眠れないから眠れる

注射をするなんて必要ない、と先生が言いましたから」と冷たくはねつけて、病室を出て行った。私は廊下まで追いつき、お願いします、お願いします、と何度も泣いて頼んだのに、その看護婦はとりつく島のないような冷淡な態度で、涙ぐんでいる私を尻目に去って行った。美しいその看護婦の顔を、私はいまでも忘れない。あの晩、兄は一睡もできないまま夜明けを迎え、朝の九時に息絶えた。死の床にあってもずっと口ザリオを手から離さず、祈りつづけながら逝った。

兄が遺していったものそのなかには、北条さんの日記と遺骨のはいつた小箱があつた。川端先生から兄宛てにいただいた手紙の束もあつた。私はそれらのものを兄の日記と一緒にポール箱のなかにいれて仕舞っておいた。太平洋戦争が終わり、癩の特効薬が出まわるようになり、癩予防法改正の運動が盛り上がり、そしてその運動の甲斐もなく、以前のままでの内容で新しい「らい予防法」が成立するという、そんな長い時間の流れのなかで、申しわけないとは思うのだけれど、兄の遺品のことはすっかり忘れてしまっていた。ある日、ものを整理するとき、そのポール箱を開けてみたら四、五センチ四方くらいの小さな紙の箱があつて、なかには小指の先くらいサイズのほんの小さな白いものがはいつていた。私はハツとして、「ああ、北条さんの骨だ」となんとも言えない気持ちになつた。そのままにしてはおけないので、療養所と深いかわりのあつたH神父様をお願いして、死者の月にお祈りしてもらい、院内の納骨堂におさめてもらうことにした。カトリックでいう死者の月とは、仏教でいうところのお盆のようなもので、十一月がそれにあたる。諸死者の霊に向かつて、やすらかなれと祈りを捧げる月だ。

遺骨をおさめたのは、昭和五十年十一月三十日のことだつた。納骨堂のまえで神父様のほかに八人のゆかりのある人たちと祈りを捧げながら、ここに眠る兄もやつと安心しただろう、と私は思った。三十八年ぶりで親友のところに帰つたわけだから。もうひとつはらはらしたのは、北条さんの日記をめぐって、ちよつとした事件が起きたときのことだ。兄から譲り受けていたのは昭和十二年分の小型の当用日記で、いまは資料館におさめられているけれど、そうなるまでに私はこんなに長生きするとは思っていなかったから、死んだとき一緒に焼かれちゃ困ると思つて、Fという神父様に預けておいた。当時三十三歳だつたその神父様は、神学生のころからこの病院の子供たちに聖書を教えに来てくださつていて、私も子供舎の寮母をしていたので親しくさせていただいていた。容姿端麗で折り目正しい方だつたから、ほかの神学生さんたちと一緒に来られても、百合舎の子供たちはみんなFさんに憧れたものだつた。素晴らしい声でご自分が作詩なさつた「ごらんよ、空の鳥」という歌をうたい、子供たちに教えてくれた。神父様が司祭になられたのが三十三歳のときだつた。私は、だから、キリストが死刑になつた歳と同じだなあ、と思つたものだつた。その神父様に北条さんの日記を託したのは、黙想会のためにこの病院にいらしたときだつたと思う。それから二年経つか経たないころに、「疲れました。禅寺にはいます」という書き置きを残して、神父様は姿を消してしまわれた。私は困り

果ててしまった。

ちょうどハンセン病資料館が建つ（昭和五十一年九月着工）というときで、全生園の園長をつとめられた成田稔さんが館長になるということだったから、資料館に北条さんの日記をおさめてもらったほうがいいと思った私は、成田さんに相談すると、成田さんは八方手を尽くして神父様のご実家を捜し当てられた。そして神父様のお父様宛てに、「渡辺立子さんという方が預けた北条民雄の日記を返してほしい」という丁寧な手紙を二回くらいお出しになった。それからしばらくして、日記はもどつて来た。お父様のお名前で成田さん宛てに、手紙も同封されていて、私はコピーを成田さんからいただいた。そこには最後に神父様の懐かしい文字で、こう書かれてあった。

ある時期、私はそちらにお邪魔したことがありました。そのときに、父とも慕い母とも思っておりました渡辺ご夫妻には、ひとかたならぬお世話になりました。終生忘れない恩人として、いつも思っております。その大切な恩人からお預かりした日記は、肌身離さず生涯大切に持っていていようと思っておりますが、今、感謝をこめて、謹んでお返し致します。

私は神父様のこの手紙を何度も何度も読み返し、いまでも暗唱することができ。嬉しく、ほつとし、神父様の幸福を祈らずにはいられなかった。

伊藤秋雄の追悼記（昭和一七年）

永年指導と交誼を賜ってきた東條耿一氏が逝去された。九月四日午前九時頃であった。亡くなられる前日、私が枕頭に見舞つたのだが、「もう顔が見えない」とちからない聲で話されたが、まだまだこのやうにならうとは思はなかった。それにしても愚かしい私には何も御恩返しになるやうな事も出来なかった。ただ一つ自分の拙ない作が、四季誌に推薦されそれを見て行って貰った事に幾ばくの安らぎを感じるばかりである。

私が氏を知ったのは昭和十二年頃だったと思ふ。私は入園後間もなく詩に興味を持ち、當時の詩話曾の人々を遠くから羨望と尊敬を以て眺めてゐた頃で、内田氏や東條氏の体躯の大きい、がっしりとした風貌を眺めた時、何んとも云へぬ信頼感が勃然として湧きあがってくるのを痛感した。入園後一年程経て私は現在の収容棟棟附添となり、作業を同じくしてゐる田中兄などを通じて、本格的に東條氏と交誼を結ぶやうになった。當時氏の作品は四季誌や文學界などに盛んに掲載されて居た。私が時折り訪ねて行くと、氏は大抵何かやって居られた。机に向つて願書とか、原稿とかに熱中して居られるが、どのやうな場合でも、本當に心よく迎へ入れて呉れた。親しみのある温い態度に、私は私の方から幾度か、あまり仕事の邪魔をしてはと躊躇したか知れなかった。すると

氏は、私のさうした氣使ひを知つて、叱りつけるやうに小言を云ふのだった。さうした溢るるやうな温情に對して、私は涙の垂れるやうな信頼と親しみを幾度味はつたか知れない。氏の作品や人格に就いては、私如きものが云々するのは余りにも輕卒なので、又いづれ先輩の方々に麗筆を仰ぐとして、此處には私なりの氏の風貌をいささかなりと誌して面影を偲びたいと思ふ。

私は人間としての氏も好きであつたが、氏の作品もまた好きであつた。やはりさうかく、ぬくみのある詩はしみじみと、心の底に迫るものがあつた。やはりその人の作品は、その人を無言のうちに語つてゐると思つた。ここ一二年體も大變弱られ眼の方もあまり良くなかつたので、書く事はしないやうだったが、時折読んで貰つてゐたやうだ。三好達治著、一點鐘が、絶版になつて求める事が出来なかつたのを酷く惜しがつてゐた。典雅な三好先生の作品などが一番好きであつたのではないかと思ふ。又氏は一頃、三好先生を師としてその俊敏を認められたものだったが、その後種々の事情で最近はその交誼も絶たれてゐたやうであつた。私はよくその話を聴かして貰つたが、實に惜しい事であつたと思はざるを得ない。氏に今少しの健康があつたらと、しみじみ思ふのである。でも氏にとつてはさ程惜しいものでは無かつたのかも知れなかつた。氏はそれ以上のもを得たのだから少なくとも私にはさう思へるのである。あの當時(三好先生に師事してゐる頃)から氏には、しきりと心に動揺があつたやうに思ふ。それは單なる名声の為とか、物質の為めとかでは無論なく、純一なる精神の安置所を訪ねてであつた。如何にして魂の安住を得ようかと、歌に迷ひ、句に彷徨ひ、生活を眞劍につきつめた態は、はた目にも痛々しい程であつた。だが氏は遂に目的を得た。最後に行き着いたのは、聖なるカトリック信仰であつた。そこに以前にも増して落ち着いた態が見られ、深々と柔らかなものに埋まつてゐる安らかな姿が見られた。今にして憶へば、僅か五年程の交誼ではあつたが、私は氏に依つて、人生への指針を教へられ、ちからづけられた事は、海山にたとへられぬ程大きい。亡くなられて未だ一七日にも充たぬ今日此頃では、未だに亡くなられたとは思へぬ何かがある。やがて日が経るにつれてしみじみ寂しさを味はふ時が必ずくるに違ひないと思ふ。その時には又様々な思ひ出を書いて慰めたい。

(昭和十七年山桜十一月号)